

② 高橋廣治 I

高橋廣治は、一八八五年（明治一八年）、静岡県磐田郡笠西村（現在の袋井市）で農家の次男として生まれた。十五歳の時から三年間、静岡県中遠町の組合立簡易農学校で農業と養鶏の関係などの農業教育を受けた。農学校を卒業した廣治は、農業に従事しながら養鶏の研究を始めた。鶏に卵をたくさん産ませるために肥料として使われていた豆かすや鰯かすを餌としてみたり、一度にたくさん卵を孵化させるために孵卵器を作ったりし、地元では「鶏博士」と呼ばれていた。

一九〇七年（明治四〇年）、二十二歳にな



太平寺境内にある  
鶏の供養塔（大東町）

った廣治は、山崎延吉に嚮望されて、愛知県立農事試験場畜産部主任として採用された。そのころ、安城を中心とするこの碧海地方では一部農家で養鶏が始まっていた。収穫の時に出るしいなや野菜などの残り物を飼料にあて、鶏糞から堆肥を作り、有機質に乏しい土地の改良を図った。卵は、棒手振と呼ばれる卵買い出し人を通して販売し、農家の現金収入の道を開き、家計の助けとしていた。

農事試験場（清洲）に着任した廣治は、安くて質のよい飼料の研究や孵化・育雛・採卵・採種などの試験に没頭した。中でも、産卵率を高めるために名古屋コーチン種の多産改良と普及に全力を集中した。そして、休日には養鶏家を訪問して飼育の状況を見せてもらい、養鶏技術を習得した。さらに、自宅でも五百羽ほどの養鶏をし、育雛飼料の配合試験を行い、人工育雛飼料の配合標準表を作成した。大正時代になると景気は衰退し、農村は窮乏した。肥料は高く、米価は安く、農村の経済状態は悲惨なものであった。副業養鶏により農村の救済を考える廣治は、碧海郡の各農村を「農村の振興は養鶏農にあり」と講演して回った。各地の講演会は、会場に入りきらないほどの盛況であった。廣治は「鶏卵の収入のほかに鶏糞という自給肥料が無代価で得られる。あえて化学肥料を購入する必要はない」と力説した。連日、昼夜三回の講演で、「声はかれ、睡眠は不足する。頭痛のため気

力は尽きて演壇に立つこともできなくなった」と回想している。

こうした廣治の努力により、各農家が養鶏を始め、碧海郡は副業養鶏の中心地となった。一九一七年（大正六年）には、碧海郡養鶏組合連合会が設立され、技術指導と競争入札による共同販売により、養鶏が農家経済の一翼を担うようになってきた。すなわち、廣治の研究や養鶏を広める努力により、日本デンマークを支えた多角形農業の一角が形成されたと言える。山崎延吉は、「碧海郡は、日本におけるデンマークのごとき鶏卵の生産地をほうふつさせるものがある」と賞賛している。

廣治は、著作活動にも力を入れた。一九一七年（大正六年）、自らの研究を掲載した月刊誌「養鶏之日本」



山崎文庫所蔵（文化センター）

を創刊した。この雑誌は全国の養鶏関係者から注目を浴び、創刊数年で三千部という発行部数を誇った。そして、全国から寄せられる鶏種や飼料、孵化、育雛、管理、疾病などの質問に答えるために、一九二〇年（大正九年）『養鶏の難問五百題』を出版した。

文 三上裕保